

優しさの形

杉並区立高井戸中学校3年 吉田 磨奈

税金は、私に明るい未来をくれた。

小学二年生のころ、私は病院で「思春期早発症」と診断を受けた。通常は11歳ごろから始まることが多いとされている思春期が、早く始まってしまうという病気である。何らかの原因で性ホルモンが早い時期から盛んに分泌されるようになり、低身長や嫌がらせの原因にもなることがある。小学二年生にしてすでに女性らしい体つきをしていた私は、「自分は他の子と違う」と不安を抱いていたし、そうやって周りと比べる自分が何より嫌いだった。

そんな体の変化を受けて、母と一緒に病院へ行き、治療を受けた。リュープリンという性ホルモンの分泌を抑える薬を注射し、思春期の進行を遅らせるのだ。私は小二から始めて約四年間、治療を受けていた。

この治療はお金がかかる。月に一回、大きな総合病院でリュープリン注射と尿検査、三か月に一回のレントゲン検査と血液検査があった。他にも不定期にお腹のエコー検査をしたり、点滴を受けたりと様々だった。リュープリンは一瓶約二万八千円、一回で二瓶を注射していたので、ひと月に約五万六千円はかかる。四年間では約二百七十万円だ。その他検査にかかるお金を含めると、約三百万円にもなる。当時の父と母は、この金額に治療をあきらめようと思ったそうだ。

今、私は中学三年生だ。人より低い身長も体つきも含め、自分のことを大切にしたいと思えるようになった。治療を受け、だんだんと自分に自信がついて、様々なことに挑戦できている。

治療費は、医療費助成制度で大部分がまかなわれていたそうだ。本来私の両親が負担するはずだった三百万円を、国中の人々が少しずつ出した税金でまかなってくれた。私だけではない。あの総合病院には、たくさんの人がいた。待合室はいつも人であふれていた。そしてその大勢が、税金によって高額な医療費のかかる治療を受けることができ、今を明るく生きている。

当時の私に、医療費助成制度が自信と未来をくれたように思う。税金がなければ今の自分には出会えなかった。ポジティブな考え方で毎日を過ごすことはできなかった。私たちが国にあずけた税金は、明るい未来の支えになる。様々な人の優しさが形となって、誰かの未来をつくりだす。その未来は、優しさからできた明るい未来だ。

私もその優しさの一部となって、自分の、日本の未来を明るく照らしたい。納税を通して、誰かに自分の優しさを届けたいと思う。未来に向かってできることをする。そんな考え方が、この先納税を通してもっと広がってほしい。